

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	小学校教科書『読書入門（明治十九年刊）における』 「いろは歌」から「五十音図」への転換理由
Author(s)	佐々木, 勇
Citation	論叢 国語教育学 , 17 : 52 - 64
Issue Date	2021-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/51115
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051115
Right	
Relation	



小学校教科書『讀書入門』（明治十九年刊）における 「いろは歌」から「五十音図」への転換理由

佐々木 勇

○、本稿の目的

「五十音図」は、現行の小学校一年生国語教科書に必ず掲載される。その歴史は古く、十世紀末頃の写本が現存する^①。悉曇学（梵字・サンスクリット語に関する学問）の中で生まれ、日本語音韻の図表として発展し、現代に至る。

一方、「いろは歌」（第二節に掲げる）は、大東急記念文庫蔵『金光明最勝音義』承暦三年（一〇七九）鈔本に書写されたものが最古であり、仮名文字の一覧として、明治時代以降も使用された。

現在では、国語辞典の見出し語配列は、五十音順以外には考えがたしい。

しかし、院政末期成立の『色葉字類抄』以来、いろは順配列が長く続いた。五十音順配列の最初は、一四八四年成立『温故知新書』であり、定着のきっかけは、大槻文彦『言海』の一八八九—一八九一年の刊行であった^②。

児童への文字指導においても、明治時代に入ってなお、「いろは歌」が用いられていた。

明治十四年（一八八一）五月四日に発せられた「小學校教則綱領」（文部省達第十二号）の第十一条（第三章 小學各等科程度）は、左のとおりである（傍線は引用者。以下同）。

第十一條 讀書 讀書ヲ分テ讀方及作文トス

初等科ノ讀方ハ伊呂波、五十音、濁音、次清音、假名ノ單語、短句等ヨリ始メテ假名交リ文ノ讀本ニ入り兼テ讀本中緊要ノ字句ヲ書取ラシメ詳ニ之ヲ理會セシムルコトヲ務ムヘシ。（略）。

初等教育において、「いろは歌」先習から「五十音図」先習に転換したのは、明治十九年（一八八六）九月刊の小学校教科用書・文部省編輯局『讀書入門』（よみかきにゅうもん）であった。

「五十音図」と「いろは歌」に関する研究は、それぞれに多く、専書も公刊されている^③。

しかし、『讀書入門』で「いろは歌」から「五十音図」に転換した理由は、説明されていない。

『讀書入門』は、それまでの日本の国語教育とは異なり、児童に「觀念」を形成し、それを言語として発音させた後、文字を教えるという教育の順序を採用した。

本稿では、この教育方針の転換こそが、「五十音図」への転換理由であったことを述べる。

一、先行研究と未解決の課題

井上越『小學讀本編纂史』（「岩波講座 国語教育」一九三七年、

岩波書店)は、明治十九年刊『讀書入門』について、「實に空前の編著であり、爾來約四十年、讀本編纂の基礎を定めたものであつた」(二四頁)、「在來の讀本が専ら讀むことを主としてゐたのに対し、讀み書きを併行することを主張したのは、實に教育上の新しい觀點に立つもの」(二五頁)、と評した。

『讀書入門』は、諸点において画期的な国語教科書であつた。

『小学讀本便覽 第二卷』(一九七八年、武蔵野書院) 古田東朔「解説」は、『讀書入門』の五十音図に着目し、次のごとくに述べる。

「五十音図」を正面に出し、「いろは」の扱いを後退させている。「教則綱領」では「伊呂波、五十音」という順にあげていたのであつたが、ここはその順に従っている訳ではない。「いろは図」は巻末に至つてようやく示されるだけであり、それまでの讀本に比べて、大きい変革である。

吉田裕久「近代国語教科書の研究——『讀書入門』(明19)について——」(『愛媛国文と教育』14・15、一九八三年七月)は、五十音図が優勢となる根底に次の事情が存したであろうとして、『国語学大辞典』(一九八〇年、東京堂出版)の「五十音図」の記述を引用する。

その配列は、発音の共通性に従つて同行・同段を作るもので、かつ、行・段ともに五字ずつに区切つて唱えることができるので、いろはよりはるかに組織的で、記憶するのに便利であり、通時的な音韻変化や活用その他の語形交替などを説明するのに有効な原理としてなお利用される面が大きい。(林大執筆部分)

馬淵和夫『五十音図の話』(一九九三年、大修館書店)にも、明治における「いろは歌」から「五十音図」への転換に関して、つぎの発言が有る。

文字列としては「いろは」で充分なのに、なぜ「五十音図」を出

さねばならなかつたのか。これについては、「五十音図」は音を教えるものという意識があつたことは見のがせない。(26頁)

だが、「文字列」である「いろは歌」から、発音に基づいて組織的に並べた「五十音図」への転換が、なぜほかならぬ『讀書入門』(明治十九年)においてなされたのかは、疑問のまま残つた。

この問いを解こうとしたのが、Atanayake Piyathika「日本の近代国語教育における五十音図の役割——明治期の国語教科書を中心に——」(『名古屋言語研究』5、二〇一一年三月)である。この論文では、「初等国語教育における「音」中心の教育への転換が片仮名と五十音図の位置づけにも大きく影響した」(15頁「要旨」とする。論文の「終わりに」(27頁)にも、次のようにある。

初等国語教育では、「音」中心の教育に転回したといえる。その背景にはドイツの国語教科書の方針がある。つまり、絵によつて「ものの観念」を知り、それを言語にして「言葉」を「発音」し、書くために「文字」を学習するという形式である。(以下、略)。

右のとおり、「観念」「発音」「文字」の順で教える「ドイツの国語教科書の方針」が背景に有ることを指摘しながら、「音」中心の教育に転換した、とする。

しかし、「ドイツの国語教科書」も、『讀書入門』も、「音」中心の教育」としてまとめられる教科書ではない。「観念」「理解」が始めにあることが、重要である。この点は、後述する。

『讀書入門』において「五十音図」が選択された理由を説明するには、まず、『讀書入門』の根底にある教育観を正しく理解しなければならぬ。

その上で、その教育観から生まれた、観念↓言語音↓文字の読み・書きの順の教授法において、「いろは歌」ではなく、「五十音図」が

選択された理由を説明する必要がある。

二、『讀書入門』（明治十九年）の変革

画期的な教科書『讀書入門』は、『日本教科書大系 近代編 第4巻 国語（二）』（一九六四年、講談社）や『小学読本便覧 第二巻』（一九七八年、武蔵野書院）に、その全文が収載された。現在では、国立国会図書館デジタルコレクションや大学リポジトリ等で、全文の画像をダウンロードできる。今、明治十七年の『讀書入門』を国立国会図書館デジタルコレクション、明治十九年『讀書入門』を東京学芸大学リポジトリの公開画像から引用する。

1. 明治十七年刊『讀書入門』（国会図書館・特34962）

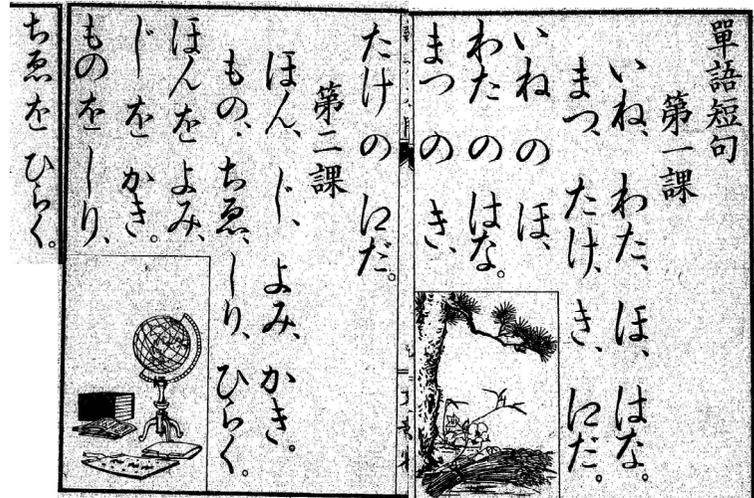
讀方入門		平仮名	
へ	い	は	ほ
と	ろ	に	ふ
と	ち	り	ぬ
と	ち	り	ぬ

せ	み	あ	け	の	な	た	る
せ	み	あ	け	の	な	た	る
す	し	さ	ふ	に	ら	れ	を
す	し	さ	ふ	に	ら	れ	を
ん	ゑ	き	こ	く	む	ろ	わ
ん	ゑ	き	こ	く	む	ろ	わ
と	ひ	ゆ	に	や	う	つ	か
と	ひ	ゆ	に	や	う	つ	か
	も	め	て	ま	ね	ね	よ
	も	め	て	ま	ね	ね	よ

明治十七年『讀書入門』には、巻頭に平仮名・片仮名の「いろは歌」が有る（平仮名の「いろは歌」のみ引用した）。

これらに続いて、片仮名の「五十音」が三ページに亘って掲げられ、「濁音」「次清音」も片仮名で記される。その次に、「数字」の「一」「十百千万」を載せてから、本編第一課が始まる。

第一課・第二課は、左のごとくである。



第一課から、「單語短句」として、平仮名の八単語を挙げる。「江」などは、初学者には形を整えることが難しかったであろう。続いて、それら八単語を、一語とばしに「の」で繋いだ「短句」が記される。しかし、対応する挿し絵は小さく、どれが「いねのほ」でどれが「わたのはな」なのか、瞬時には判別できない。

2. 明治十九年刊『讀書入門』

(東京学芸大学附属図書館・T1A1280/b)

『讀書入門』は、「いろは歌」等を巻頭に掲げない。



第一課は、本書「教師須知」第六条に「其始メハ、新ニ教フベキ字數ヲ少クシ」とある通り、二字一語のみで、挿し絵の方が大きい。



第二課は、「ハナ。トリ。」の二語である。二語に増えても、挿し絵のどれがハナで、いずれがトリかは、迷いようがない。

第一課「ハト」の「ハ」「ト」は、第二課「ハナ。トリ。」の頭音に使用されている。これは、正しい発音を音節ごとに区切つて発音し、それらの音を使用して、新たな単語を作り出す「ボック氏のレーゼブツフ」(後に引用)の教育法を日本語に応用したものである。

また、「ハ」「ト」「ナ」「リ」は、本書「教師須知」第三条「片假名ノ中ニテモ、點畫ノ多寡、運筆ノ難易等ヲ量リテ、其次序ヲ爲セリ。」の記述から、片假名のうち、二本の線で書ける文字を意図的に選定したものであることが知られる。

第三課以降も、公開画像でご覧頂きたい。第六課は、「ヨキ ネコ。ワロキ イヌ。」で、悪役に回されたイヌの口には、台所から啜えてきたのであろう魚が描かれている。挿し絵を見て、「ワロキ イヌ。」の意味が理解できるように工夫されている。「教師須知」第六条の始めに、「此書、第一課ヨリ第十一課マデハ、實物ノ名稱性質及作用等ニ就キテ、片假名文字ヲ教フベキ者ナリ。」と記す通りの内容である。「五十音図」は、五十音図の文字すべてが使われるのを待つて、第十一課の後に掲げられる。

これも、『讀書入門』「教師須知」第六条に記されたとおりである。

一 (略)。五十音ノ文字ハ、錯舉互見シテ、一モ教ヘザルナキニ至リテ、更ニ五十音圖ニ就キテ、前ニ學ビシ所ノ者ヲ練習シ、且其發音ヲ正シクセシメンコトヲ要セリ。

「五十音図」は、「前ニ學ビシ所ノ者ヲ練習シ」「發音ヲ正シクセシメン」ために、この位置に置かれた。

この第六条では、「五十音」と「五十音図」の用語を使い分けている点にも、注意される。

讀書入門				
五十音圖				
ナ	タ	サ	カ	ア
ニ	チ	シ	キ	イ
ヌ	ツ	ス	ク	ウ
ネ	テ	セ	ケ	エ
ノ	ト	ソ	コ	オ

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ
	井	リ	イ	ミ	ヒ
	ウ	ル	エ	ム	フ
	エ	レ	エ	メ	ヘ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ

右の「五十音図」は、見開き二ページで全体が一覧できるように綴じられている(明治十七年『讀書入門』の「五十音」は、三ページを使ったため、全体を見渡せなかった)。

「濁音図」「次清音図」「数字図」も、第十二課〜第二十課までで、濁音字・次清音字・数字のすべてを使用してから掲載する。

三、「開発主義」と「ボック氏のレーゼブッフ」の影響

1. 明治十年代後半の「開発主義」

『日本教科書大系 近代編 第五卷 国語(二)』(一九六四)の「所収教科書解題」は、『讀書入門』について、次のごとくに記す。
本書において初歩となる基本文字を提出する際に、文字の示している事物即ち「ハト」「トリ」「ハナ」などの観念を十分に児童のうちに起さしめることとした。これは開発主義における観念を先にして、表出は後にするという原則によったものである。そのため挿画も直観に役立つように工夫して示してある。著者がこの点についての方法としては、観念をつくってから、その事物を言語によって表出し、発音を正しくしてから、その音を示す文字を示して、その読み方をよく教えるようにしている。

ここに言う「開発主義」とは、ペスタロッチの「心性開発主義」を指す。先引の吉田(一九八三)も、次のように指摘する。

学習者(児童)への着眼ということに関しては、明治十年代後半の教育実践に大きな影響を与えていた、児童の能力の開発を目的とするペスタロッチの「心性開発主義」に共鳴して成ったものということができる。(9頁下段)

これに続けて、吉田(一九八三)は、観念想起↓発音↓文字化(読む・書く)の指導方法は、「その当時、教育界に広く迎えられていた開発主義教授法、なかんずくその代表的著書『改正教授術』(若林虎三郎、白井毅著、明16・6、普及社刊)と通い合うものであった。」として、同書の「観念ヲ先ニシ表出ヲ後ニスルノ主義」を含む文章を引用し、『讀書入門』は、まさにこの線にのっとって編纂された教科書であった。」とする。さらに、『讀書入門』とほぼ同じ時期に刊

行された新保磐次著『日本読本初歩 第一』(明19・1・25版權免許、金港堂)の「教師ハ實物或ハ圖畫ニ就テ先ヅ生徒ニ問答シ、然後文字ヲ授クベシ。」(例言「第三項」)も引く。⁹⁾この後、『讀書入門』に挿し絵が豊富であることを確認した上で、この節を次のように結ぶ。

『讀書入門』は、こうして挿絵の点から見ても児童の心性開発をまず心がけ、その基盤に立つて文字を習得させるという当時の教育思潮(心性開発主義)の中で、一つの典型的な入門期教科書としてその成立を見たのである。

2. 『讀書入門』の編者

『讀書入門』の編者・湯本武比古(一八五五—一九二五)は、次のごとく述べる。⁹⁾

余は明治十八年十二月讀書入門編輯の命を受け、同書の目的及性質、並に編輯の大方針を立てんとし、平素からして、其の大體は誠に然かあるべしと信じ、且つ自ら之を翻譯して居た所の、ドイツ人ボック氏のレーゼブッフにつき、其の讀書入門即ちフィーベルに関する趣旨、目的及び教授法等の部分の翻譯を伊澤局長に提出し、大體これに依つて新讀書入門を編輯すべしといふことを申し出でたれば、(以下略)。(中略)是に於て余は晝夜兼行といふ有様で編輯に従ひ、翌十九年一月早々より筆を執つて、三月上旬、其の稿を脱したからして、これを局長に呈出したれば、伊澤先生は、其の成功の速かなる、又其の内容の當を得たるを大に喜ばれ、編輯局最新の事業として、森文相に呈せられた。

(湯本武比古『今上陛下御幼時の御教育』)
森文部大臣は就任するや否や、直に之を改革し、西村局長や局内の多くの學者達をやめて、伊澤氏を局長としたが、此の時残され

た者は、教科書編纂に都合のよい者ばかりで、佐藤誠実、山縣悌三郎と私等数人だけであつた。其處で早速小學校の教科書を作る事となり、尺秀三郎君が小学讀本を、私は讀書入門を作る事となつた。
 (湯本武比古「読書入門 東宮御学問所の御事」
 「伊澤局長」 「伊澤先生」 「伊澤氏」とは伊澤修二(一八五一—一九一七)、「森文相」 「森文部大臣」は森有礼(一八四七—一八八九)である。

この湯本の記述が事実であれば、『讀書入門』は、湯本が単独で編輯したことになる。少なくとも、構想・素稿は、湯本一人で成された。

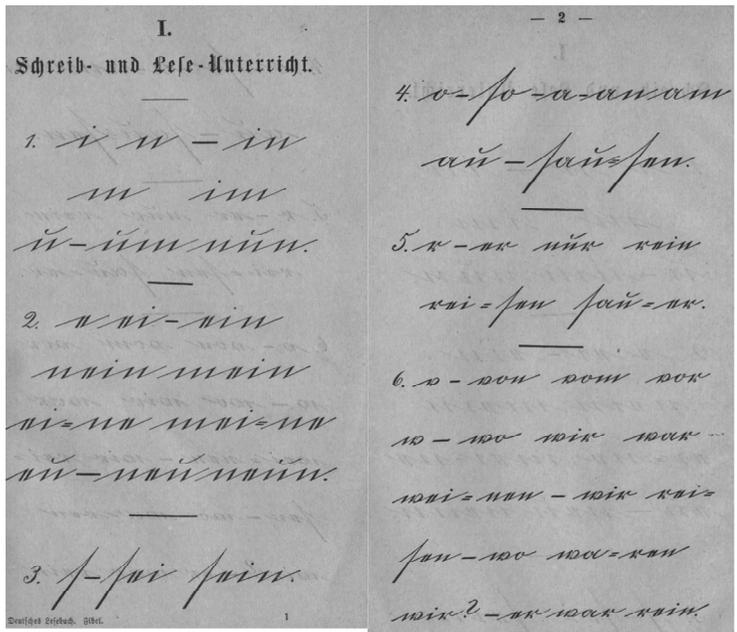
3. 「ボック氏のレーゼブッフ」の影響

湯本が言う「ボック氏」は、ドイツの Eduard Bock (一八一六—一八九三)であることは、先学が指摘済みである。

ただし、この Eduard Bock が関わった多数の「フイーベル」(Fibel <小学一年生の絵入り入門国語教科書>)・「レーゼブッフ」(Lesebuch <讀本>)のうち、湯本が基づいた「レーゼブッフ」あるいは「フイーベル」がどの本であるのかは、定説を見ていなかった。

これについて、大橋敦夫(一九九四)は、Eduard Bock 「Deutsche Fibel und Lesebuch」であろうとした。⁽¹⁰⁾ また、首藤久義(二〇一三)も、Eduard Bock 「Deutsche Fibel und Lesebuch」1871年版原本をドイツで見て、『読書入門』との類似性を確認した、と報告する。⁽¹¹⁾

現在では、ドイツデジタル図書館 (DDB) で、Eduard Bock 「Deutsche Fibel und Lesebuch」(1871年)の全文を閲覧できる。その1871年 Breslau 版の本課冒頭画像を、DDB から引用する。



右の第一課「Schreib- und Lese-Unterricht」(書き方と読み方のレッスン)には、19世紀のドイツ筆記体小文字で、「I. i n / in / m im / u um nun.」「2. e i / ein / n e i n / e i n e m e i n e n / n e u n e u n.」と記される。文字の書き方を教え、発音を教えて、それを組み合わせる単語を書かせ、発音させる教科書である。巻頭に『讀方入門』のような文字一覧表は無く、第一課冒頭から「いね、わた、ほ、はな。」と、異なる音で構成される単語を次々と出すこともしない。

19世紀のドイツ筆記体小文字「I n n e」などは、直線と点のみで

書ける。『讀書入門』はこれに倣って、二本の線で書ける片仮名「ハ」「ト」「ナ」「リ」と、それが示す音で構成される「ハト」「ハナ。トリ」を、第一課・第二課に置いた。『讀書入門』の片仮名先習にも、「ボック氏のレーゼブック」の影響が存したことを指摘したい。

ただし、「Deutsche Fibel und Lesebuch」(1871年)に挙げられている単語は、in (前置詞)・im (= in + dem (定冠詞))・um (前置詞)のような機能語である。それ故、挿し絵は無い。挿し絵は、40頁の41課以降に現われる (DDBの画像、参照)。

この「Deutsche Fibel und Lesebuch」から、『讀書入門』を作成するには、観念を想起しやすい「實物ノ名稱性質及作用」に単語を変更し、それらに対応する挿し絵を入れなければならない。

とはいえ、具象物の単語と挿し絵とで第一課を開始する方式は、『讀方入門』までにできあがっていた。それゆえ、『讀書入門』を完成させることができたのである¹²⁾。

四、「五十音図」選択の理由

日本における「心性開發主義」隆盛のもと、「ボック氏のレーゼブック」の方針は、明治十九年の『讀書入門』に引き継がれた。

『讀書入門』「教師須知」の第一条・第二条・第四条を左に引用する (第三条は引用済み)。

(第一条)

一 此書ハ、年齢六歳以上ノ初學者ニ、最初半年間、言語ヲ學ビ、文字ヲ讀ムコト、字形ヲ石盤上ニ書クコト、ヲ教フル用ニ供シタルナリ。故ニ名ケテ、讀書入門ト云フ。

(第二条)

一 此書、從前ノ讀方入門トハ、大ニ其趣ヲ異ニシ、單ニ讀ムコトノ

ミヲ主トセズ、同時ニ書クコトヲモ、併セ授クル方法ヲ設ケタリ。是課業ノ變換ニ因リテ、兒童ニ倦怠ヲ生ゼシメザルト、書寫ノ工夫ニ由リテ、構造力等ヲ發達セシメントノ目的ニ出タル者ナリ。

(第四条)

一 此書ヲ兒童ニ授クルニハ、必ず先ヅ各課ノ主意トセル事物 (例ハ「ハト」「トリ」「ハナ」ノ類)ノ観念ヲ十分ニ起サシメ、又之ヲ言語ニ發シテ、其發音ヲ明ナラシメ、而シテ後ニ、其音ヲ表ハスニハ、此ノ文字ヲ以テス、故ニ其文字ハ、斯ク讀ムベシ、其形ハ、斯ク書クベシト、懇到叮嚀ニ教フベシ。是讀ムコト、書クコト、ヲ教フル眞正ノ順序ナリ。教師ハ、深ク此ニ意ヲ注ガンコトヲ要ス。

右の第一条・第二条で、この『讀書入門』は、明治十七年刊『讀方入門』と「大ニ其趣ヲ異ニシ」、「言語ヲ學ビ、文字ヲ讀ムコト、字形ヲ石盤上ニ書クコト、ヲ教フル」ための書であることを強調する。それは、『讀書入門』の書名に表われている。

『讀書入門』の冒頭では、事物の観念を具体的に想起させるために、語数を極限まで絞り、大きな挿し絵が入れられていた。その上で、観念に対応する言語音とそれを記す文字とを学ぶ。

第四条は、兒童に事物の観念を十分に想起させ、それを言語として音声化し、その言語音を示す文字を教えること。文字は読めるだけでなく、書けるようにすること。この「眞正ノ順序」を誤らず、懇切丁寧に教えることを、教師に強く注意している。

この方法による教授には、観念に直結する言語音を示す文字を、発音から探し、兒童が自ら復習できる一覧表が必要である。

それは、文字列「いろは歌」ではなく、音図「五十音図」である。

これが、『讀書入門』において「五十音図」が選ばれた理由である。

五、むすび

本稿では、ほかではない明治十九年刊『讀書入門』において、「いろは歌」から「五十音図」へ転換したのはなぜか、という問いを立て、湯本武比古の教育観・文字観から考察した。⁽¹⁾

本稿の結論は、右に記した通りである。

『讀書入門』以降も、「いろは歌」を先に掲げた「読本」は存在する。⁽¹⁵⁾しかし、「五十音図」先習がまもなく定着し、「いろは歌」は小学校教科書から姿を消す。⁽¹⁶⁾

文字は、観念に直結した言語を示す。これは、現在では常識である。すべての文字は、概念を言語化した「語」を記す、「表語文字」である。⁽¹⁷⁾『讀書入門』の根本思想は、現代言語学における文字論の知見を先取りしていた、と言えよう。

注

(1) 醍醐寺蔵『孔雀経音義』十世紀末頃写本に付載される。ただし、「キョカケク」等の順であり、ア行とナ行は無い。『孔雀経音義 下』（古辞書音義集成 第11巻、一九八三年、汲古書院）に影印所収。肥爪周二「五十音図」（『日本語学大辞典』二〇一八年、東京堂出版）、参照。

(2) 沖森卓也「いろは引き・五十音引き辞典の系譜」（月刊しにか）11巻3号、二〇〇〇年三月）、飛田良文「いろは順から五十音順へ」（『日本近代語研究』3（二〇〇二年、ひつじ書房）、明治期国語辞書大系『書誌と研究』二〇〇三年、大空社）に修正転載）、参照。五十音分類辞書の出現が遅い理由として、小松英雄『いろはうた 日本語史へのいざない』（一九七九年、中央公論社。二〇〇九年、講談社学術文庫）は、五十音図が「サンスクリット語音韻学を学習する目的に用いられていて、世間一般には通用しておらず、また、母音の順序も行の順序も、いまのようには

一定していなかった」（213頁）ことを挙げている。

(3) 大矢透編纂『音圖及手習詞歌考』（一九一八年、大日本圖書）、山田孝雄『五十音圖の歴史』（一九三八年、宝文館）、右注小松著書、馬淵和夫『五十音図の話』（一九九三年、大修館書店）。

(4) 論文中に、「明治期十年代までは「音」の説明に片仮名を使用する傾向がある」（18頁）、「五十音図によって学習を始めるようになった検定制度期（明治十九年以降（佐々木注）では五十音図で濁音、半濁音、拗音も習うようになる。これも「音」優先の方針のあらわれと考えられる。」（20頁）の記述はある。しかし、これらの記述は、『讀書入門』誕生時に編者・湯本の周辺に居た森有礼や伊沢修二の思想も勘案し、「片仮名」「五十音図」先習の事実から、「音」優先の方針のあらわれ」と推測したものに過ぎない。『讀書入門』が「音」中心の教育のための教科書であることは、この論文中で論証されていないし、論証することもできない。

なお、当該論文は、学位論文『日本の国語教育における五十音図の役割——シンハラ語ホーディアヤとの比較対照——』（二〇一三年）に組み込まれた。この学位論文でも、左のとおり、「音声を中心」とした国語教育となったことが、五十音図が用いられた理由であるとされている。

『讀書入門』ではボック読本と同様に挿絵を多用しながら「観念」「理解」「文字例の読み」「発音」「文字」「書き」の順をとり、読み書きの一体化がなされているといえる。教育制度を検討していた人々が音声教育に高い意識を持っていたことよって、日本の国語教育は大きく転回した。いわば「音声を中心」とした国語教育となったといえる。

（中略）。以上の経緯から明治十九年以降には音声と結び付けられた片仮名先習が確立し、古代から文字を学習するために使われていたいろは歌に代わって五十音図によって国語の「音声」も「文字」も習うようになったといえる。（108頁）

「明治十九年以降には音声と結び付けられた片仮名先習が確立」という捉え方も、誤っている。『讀書入門』は、「音声と結び付けられた」から

片仮名先習にしたのではない。『讀書入門』「教師須知」第三条、参照。
(5) 「五十音図」の最初の文字であつても、鋭角に払う線を持つ「ア」から教えることのようなことはしない。

なお、先行研究は、「教師須知」第三条のこれに先立つ部分「讀ミ書キヲ併セ授ケンニハ、其文字モ易キヲ先ニシテ、難キヲ後ニスルヨリ善キハナシ。而ルニ、片仮名ハ、概ネ直線ヨリ成リテ、學ビ易ク、平仮名ハ、悉ク曲線ヨリ成リテ、寫シ難シ。是本書ニ、片仮名ヲ先ニシテ、平仮名ヲ後ニスル所以ナリ。」を片仮名先習の理由として注目するのみである。

(6) 第二十一課〜第三十二課では、平仮名を教える。その際も、あたらしい平仮名が出る度に、その右に既習の片仮名を置いている。平仮名が示す言語音を片仮名を通して学習させるためである（「教師須知」第八条）。

第三十二課の次に、一ますの上に平仮名を、下に片仮名を書き入れた「五十音図」「濁音図」「次清音図」が挿入される。

第三十三課〜第四十課は、課ごとに、片仮名と平仮名とが交互に使用される（「教師須知」第九条）。

本編の終わりには、唱歌の歌詞（第三十六課「皇御国」、第三十八課「蝶々」、第四十課「大和撫子」）が交えられる（「教師須知」第十条）。

本書「教師須知」第八条〜第十条を、左に引用する。

- 一 第二十一課ヨリ第三十二課マデハ、平假名ヲ以テ清音濁音次清音等ヲ教フベキ者ニシテ、平假名ニ片假名ヲ對照シ、以テ學習ノ便ニ供シタリ。之ヲ終ヘタル後、亦平假名ニ片假名ヲ對照シタル五
十音濁音及次清音ノ圖ニ就キテ練習スベキ者ナリ。
- 一 第三十三課ヨリ第四十課マデハ、片假名平假名兩體ノ練習ニ供セ
ンガ爲メニ設ケタル者ニシテ、拗音及音便等ヲモ混合シテ教フベ
キ者ナリ。

一 此書中、間々歌詞體ノ者ヲ載セタリ。其中ニハ、兒童ノ解シ難キ語モアルベシト雖モ、唯其大意ヲ了解セシムルヲ以テ足レリトス。
蓋歌詞ハ、固ト吟詠スベキ者ナレバ、其興味ハ、専ラ意義ノ中ニ

ノミハアラズシテ、却テ歌唱ノ間ニ存スル者多カルベシ。

以上で、本書「教師須知」の全文を本稿に引用した。

(7) 『国語教育史資料 第二巻 教科書史』（一九八一年、東京法令出版）の『讀書入門』「解題」も、「巻頭の「ハト」「トリ」「ハナ」などの觀念先習の学習は、当時の開発主義による」とする。

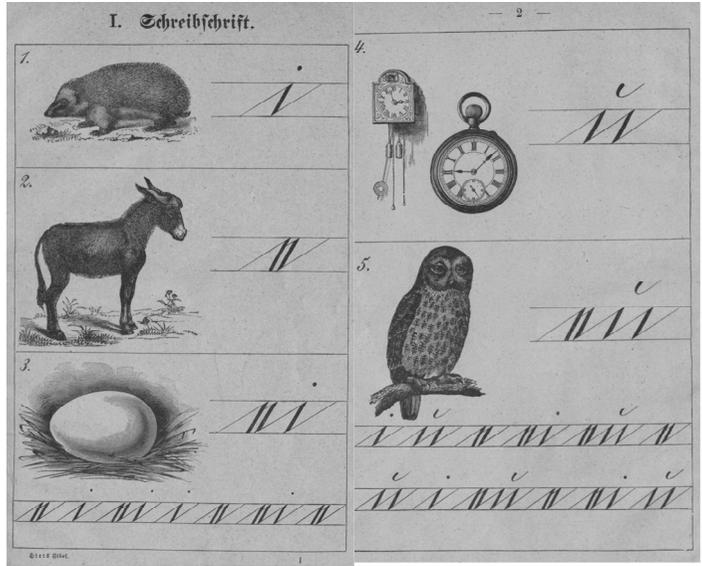
(8) ただし、この両書では、書くことの指導の必要性が『讀書入門』ほど明確ではないとする。一方、明治十七年の若林虎三郎編『小学読本 第一』（第一学年後期用）には、「すでに読み書き併行指導の視点が見られる」（10頁下段）、と吉田（一九八三）は述べる。

(9) 湯本の生没年は、信濃教育会編輯『教育功勞者列伝』（一九三五年、長野市信濃教育会）に依る。発言は、湯本武比古『今上陛下御幼時の御教育』（一九一五年、博信堂）14・15頁、同『讀書入門 東宮御學問所の御事』（国民教育奨励会編『教育五十年史』（一九二二年十月一日、民友社）所収）一〇六頁から、それぞれ引用した。

(10) 大橋敦夫「湯本武比古「讀書入門」の編纂をめぐって」（上田女子短期大学国語国文学会「学海」10、一九九四年三月）。この論文で、ボック・第一読本の明治二十九年・第十一版翻刻本が紹介された。

(11) 「科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書」（小学校国語科入門教材の歴史と展望）（二〇一三年四月一日）。

(12) DDBに現時点で公開されているものの中では、Bock, Eduard『Fibel und Lesbuch für die Unterstufe』（Breslau, 1895）<http://gei-digital.gei.de/viewer/rsaover?um=urn:nbn:de:0220-gei-19200784> が湯本編纂『讀書入門』に近く。左に、DDBの本課冒頭画像を引用する。



この本は、右のとおり、「I. Schreibrift.」(筆記体)の下に大きな挿し絵が書かれ、その右に、その語の語頭音を示す筆記体の小文字一字が記されている。1はハリネズミ(igel)の挿し絵の横に「i」、2はロバ(esel)の挿し絵の横に「e」が有る。そして、3は卵(ei)の挿し絵の横に「a」が書かれている。1・2で学んだ「i」と「e」や、3の「a」が発話でき、書くこともできるように工夫されている。このBook, Eduard Fibel und Lesebuch für die Unterstufe」(1895)の早い版、あるいはその類似の本が、『読書入門』刊行の明治十九年(1886)以前に刊行されていたかどうか、

現時点では未詳である。

湯本武比古は、明治二十二年(1889)九月に、Bookをたよって、リーグニッツ(Liegnitz)を訪れ、「十一ヶ月余り滞在した」(湯本先生小伝)『湯本武比古選集』(一九五五年、信濃教育会 所収)に依る)。この十一ヶ月間には、当然、『読書入門』が話題となったことであろう。『読書入門』の実物をボックに進呈したことも、充分考えられる。「Fibel und Lesebuch für die Unterstufe」(1895)は「Begründet」(原著者)はEduard Bock、発行人は「Ferdinand Hirt」である。このFerdinand Hirtは「Deutsche Fibel und Lesebuch」(1871年)の発行人でもある。湯本編『読書入門』がHirtの手にも渡り、Bookの1871年版を改訂する際、Hirtが『読書入門』を参考にしたこともあり得る。

そしてこのHirt改訂「Fibel und Lesebuch für die Unterstufe」(1895)は、間もなく日本に入った。明治三十一年(1898)には、1897年刊本(C版)の覆刻版が、東京の六合館から刊行されている。

本稿では、このような、読み書き入門書の日独交流があった可能性を指摘したい。

(13) 明治十七年刊『讀方入門』の「教師須知六則」の第一則には、「本書ハ、小學ノ最下級ニ於テ、初學生徒ニ讀方ヲ授クルノ用ニ供シタルモノ」とある。とはいえ、文字を書く練習もなされたものである。しかし、あくまでも、文字を読むための入門書であって、それに先立つ言語の観念が無い。文字を教育するための教科書の冒頭に、文字の一覧である「伊呂波」が置かれたのは、必然であった。

(14) 湯本は、『読書入門』の「教師須知」に示した観念想起↓言語音化↓文字化の順に学習させるべしとの思想を、後年の自らの著書でも、繰り返して述べている。

○湯本武比古『新編 応用心理学』(一八九四年五月、金港堂)

生徒ヲシテ、常ニ精神中ニ、活潑ナル肖像ヲ有セシメ、決シテ觀念ノ曖昧模糊ニ歸シ、終ニ其ノ符號タル、言語ノミヲ有スルニ至ラシメザル爲メ、屢々實物、繪畫、地圖等ノ、再三ノ觀察ヲナサシムルコト、

極メテ必要ナリ。(五〇頁)

まず、児童に「肖像」を想起させ、符号である言語の学習に進むことが重要であると説く。

○湯本武比古『新編教育学』(一八九四年十月、普及舎)

尋常科下級ノ教科目中ニ、觀察練習ノ教授ヲ置キ、此ノ練習ニヨリテ、児童ノ觀察及ビ觀念ヲ明瞭ニシ、秩序的ニシ、児童ノ觀察ノ範圍ヲ拡張シ、及ビ此ノ觀察ヲ正当ナル言語ヲ以テ、表出セシムルニ至リタルハ、実ニペスタロッツチノ功ナルトス。(58頁)

觀念を明瞭にした後、言語を表出する教育法の考案は、ペスタロッツチの功績である、とする。

教育ニシテ、若シ或ル符号ガ事物ニ、現象ガ実事ニ一致スベキ方法ヲ以テ施サル、トキハ、即チ此ノ教育ハ真ナリ。之ニ反シテ事物ヲ第二トナシ、符号ヲ第一トスル所ノ教育、即チ例ヘバ根本的ノ知識ヲ與ヘシムコトヲ務メズシテ、徒ニ言語ヲノミ授クルガ如キハ、真ノ教育ニアラザルナリ。(156頁)

事物・現象が第一であり、符号・言語は第二とするのが「真ノ教育」である、と主張する。

以後も、『新編教授學』(一八九五年、紅梅書屋)六二頁、「小学校の國語教授」(国学院編『国文論纂』(一九〇三年、大日本図書)所収)七二・七三頁等で、「外界」との「交際」によつて觀念を得、それを言語と結合させることで、児童に定着させるべきとの持論を繰り返す。

(15) 吉田 (一九八三)、参照。

(16) 明治三十三年文部省令第14号「小学校令施行規則」(八月二十一日公布)には、「五十音図」だけが掲げられ、「いろは歌」は無い。

(17) 亀井孝ほか編『日本語の歴史7 世界のなかの日本語』(一九六六年、平凡社。二〇〇七年「平凡社ライブラリー」として復刊)「平凡社ライブラリー」版213〜218頁、同『日本語の歴史 別巻 言語史研究入門』(一九六五年、平凡社。二〇〇八年「平凡社ライブラリー」として復刊)「平凡

社ライブラリー」版66〜69頁、河野六郎「文字の本質」(『岩波講座日本語8 文字』(一九七七年、岩波書店)所収。『河野六郎著作集 3』(一九八〇年、平凡社)および『文字論』(一九九四年、三省堂)に再録)等を、参照。

しかし、文字は、「表音文字」「表意文字」に分けられ、「表音文字」は「音」のみを示すという理解が、現在でも一般的なのではなかるうか。この認識が改められることを願う。

〔付記〕 本稿は、二〇二一年度前期・学部一年生対象授業「教養ゼミ」において、テキスト・小松英雄『いろはうた 日本語史へのいざない』(二〇〇九年、講談社学術文庫)の輪読中、受講生から発せられた疑問「明治時代の教育改革によつて仮名の字母表が伊呂波から五十音へ置き換えられたが、そもそも何故変更される必要があったのか。」に端を発している。吉田裕久先生には、「ご自身の御論考を紹介いただくとともに、『讀書入門』で「五十音図」を優先する理由は定かではない、と励ましていただきました。また、広島大学の仁科陽江先生・山内規嗣先生には、ドイツ語と、『Deutsche Fibel und Lesebuch』(1871年)と『讀書入門』との発想の近さについて、お教えいただきました。真剣に討議してくれた受講生の皆さんと、先生がたからの学恩に感謝いたします。

(広島大学)